

Title	副陰嚢を合併した先天性会陰部脂肪腫の1例
Author(s)	森田, 照男; 安川, 修; 松本, 美代; 新家, 俊明; 大川, 順正
Citation	泌尿器科紀要 (1991), 37(6): 647-649
Issue Date	1991-06
URL	http://hdl.handle.net/2433/117198
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

副陰囊を合併した先天性会陰部脂肪腫の1例

和歌山県立医科大学泌尿器科学教室 (主任: 大川順正教授)

森田 照男, 安川 修, 松本 美代

新家 俊明, 大川 順正

CONGENITAL PERINEAL LIPOMA WITH ACCESSORY SCROTUM: A CASE REPORT

Teruo Morita, Shu Yasukawa, Miyo Matsumoto,
Toshiaki Shinka and Tadashi Ohkawa*From the Department of Urology, Wakayama Medical College*

A tumor mass covered with scrotum-like skin on its tip was found on the perineal region of 3-year-old boy since his birth. The mass was diagnosed as congenital lipoma, which was resected, because of its gradual enlargement. Histopathological findings of the tumor indicated perineal lipoma, and the scrotum-like portion was diagnosed as an accessory scrotum. In the Japanese literature, 7 congenital perineal lipomas (6 males, 1 female) have been reported and all male cases except 1 case (no description about scrotum) were accompanied with an accessory scrotum.

We conclude that there may be a close relationship between congenital perineal lipoma and accessory scrotum.

(Acta Urol. Jpn. 37: 647-649, 1991)

Key words: Congenital perineal lipoma, Accessory scrotum

緒 言

先天性会陰部脂肪腫に副陰囊を合併した1例を経験したので、本症について若干の文献的考察を加え記載する。

症 例

患者: 3歳, 男児

主訴: 会陰部腫瘍

家族歴・既往歴: 特記事項なし

現病歴: 出生時体重3,080g. 満期正常分娩. 生下時より会陰部に小指頭大の腫瘍を認め、生後4日目に当科受診し脂肪腫と診断され経過観察を受けていた。腫瘍は緩徐ではあるが増大傾向を示したため、1987年7月27日、腫瘍切除を目的として入院となった。

現症: 身長96cm, 体重15kg. 脈拍90/分, 血圧110/70mmHg. 全身状態良好. 眼球結膜, 眼瞼結膜には黄疸, 貧血を認めず. 腹部は平坦, 軟で異常所見はみられない. 会陰部腫瘍は, 弾性軟かつ小指様の突出した様相を呈し, 左陰囊直下, 会陰縫線左側に懸垂状に存在していた. 腫瘍の先端中央部付近には陰囊皮

膚類似の外観を呈する小隆起が認められた. また, 陰囊は二分陰囊であった (Fig. 1).

入院時検査成績: 一般検血および血液生化学検査では異常所見はなく, 心電図, 胸部X線撮影上でも異常は認めなかった. 排泄性腎盂造影や膀胱尿道造影では腫瘍と尿路の交通は認めず, また, 直腸診においても腫瘍と直腸との交通は認めなかった.

これらの所見から, 二分陰囊の他には重篤な奇形の合併はないと判断し, 8月4日, 会陰部脂肪腫に対し全身麻酔下に腫瘍摘除術を施行した. 摘除した腫瘍は, 大きさ4cm×2cm×2cm, 重さ8gであった.

病理組織学的所見: 腫瘍には悪性所見はなく, 成熟した脂肪組織の増生が認められ, 術前診断通り会陰部脂肪腫と診断された (Fig. 2). また腫瘍先端の小隆起の皮下組織には平滑筋線維が認められ, 脂肪組織をあまり含まないなど, 正常の陰囊皮膚構造をもつことから会陰部副陰囊と考えられた (Fig. 3).

考 察

脂肪腫は良性腫瘍のうち最も多いもののひとつであり, その好発部位として頸部, 背部, 肩甲部, 腹壁な

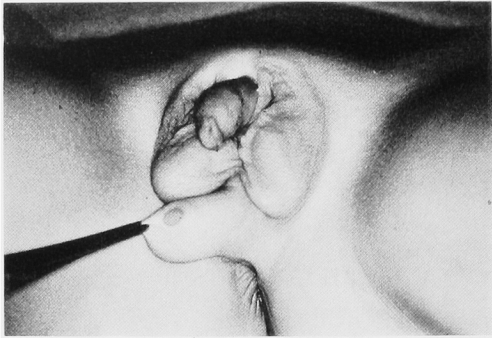


Fig. 1. Congenital perineal mass was seen just below the left scrotum and at the tip of the mass scrotum-like small swelling existed. Scrotum was bifid type.

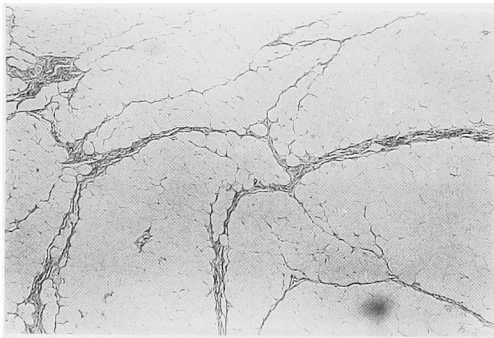


Fig. 2. The perineal tumor consisted of normal mature fat cells. (×40)

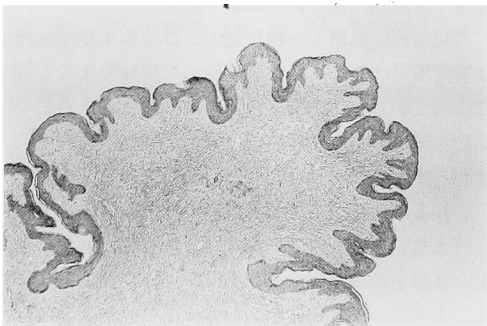


Fig. 3. Scrotum-like portion having smooth muscle in subcutaneous tissue was diagnosed perineal accessory scrotum. (×40)

どがあげられるが、陰嚢内や会陰部に発生するものは稀とされている。自験例は出生時よりすでに会陰部脂肪腫が確認された先天性のものであり、この様な症例は本邦では自験例を含めこれまでに7例が報告されている (Table 1)。第1例は1955年に整形外科から報告された症例であり、副陰嚢に関する記載はない。また、第3例は女兒に発生した有茎性脂肪腫であり極め

Table 1. Seven cases of congenital perineal lipoma in Japanese literature.

No.	報告年	報告者	性別	年齢	脂肪腫の大きさ (mm)	副陰嚢合併
1	1955	清水 ¹⁾	男	6M	40×35×30	不明
2	1979	佐藤ら ²⁾	男	2Y	くみ大	有
3	1982	深水ら ³⁾	女	7M	35×35×55	—
4	1983	前原ら ⁴⁾	男	4M	鶏卵大	有
5	1985	松井ら ⁵⁾	男	4M	ピンポン球大	有
6	1987	松井ら ⁶⁾	男	7D	34×36×46	有
7	1990	自験例	男	3Y	40×20×20	有

て珍しい症例と思われる。この2例を除くとすべての症例に副陰嚢が認められており、この両者には密接な関係があると思われる。

会陰部副陰嚢は陰嚢奇形のうちでも稀とされており、これまでに本邦では13例、世界では23例報告されているが、脂肪腫合併との記述を欠くものでも、その部における腫瘤の存在はすべての症例についてうかがわれるところである。この原因としては、おそらく腫瘤形態についての表現が異なるためと思われる。すなわち、自験例の様に腫瘤が懸垂状に発育し、その一部に副陰嚢をみるものに対しては脂肪腫として記述され、一方、陰嚢の皮膚が腫瘤全体を覆っている場合には腫瘤としての認識はあっても、脂肪腫としての記載がなされていないものと思われる。

一般に、脂肪腫は成人に多いとされているが、先天性会陰部脂肪腫では副陰嚢の合併が高頻度に認められることから、成人例のそれとは、その発生機序を異にすると考えられ、副陰嚢が生じる際、皮下の脂肪組織がなんらかの刺激を受け脂肪腫として腫瘤状に発育してくるものと思われる。

副陰嚢の発生機序として定説はいまだないが、野口ら⁷⁾は、陰唇陰嚢隆起の二重分割により同側の副陰嚢が発生し、陰唇陰嚢隆起の三重発生により正中線上の副陰嚢が生じると仮定している。この説に従うと、本例では左陰嚢直下かつ会陰縫線の左側に腫瘤および副陰嚢が存在することから、左陰唇陰嚢隆起の二重分割により副陰嚢が発生し、皮下の脂肪腫の増大と共にその先端部に位置したものと考えられる。

永野ら⁸⁾は、副陰嚢と脂肪腫などの会陰部腫瘤とを鑑別するポイントとして、明らかに陰嚢嚢を示す皮膚が存在すること、組織学的に肉様膜を証明すること、の二点が重要だとしている。しかし、今まで述べたごとく副陰嚢には脂肪腫を高率に合併することから、あえて脂肪腫と鑑別する必要はなく、むしろ脂肪腫上に

陰囊皮膚を示す部分があり, 組織学的に肉様膜が証明されれば, 副陰囊としての診断はつくものと考えらる.

自験例では生下時より会陰部脂肪腫が認められていたが, 副陰囊の存在に対してはあまり注意が向けられていなかった. しかし, これまで報告された症例を詳細に検討した結果, 先天性会陰部脂肪腫では高頻度に副陰囊を合併することが明らかとなり, 副陰囊が生ずる際, 程度の差はあっても必ず脂肪腫を伴うとしても過言ではないと思われた.

結 語

先天性会陰部脂肪腫に副陰囊を合併した1例を経験したので, この両者の合併に関する考え方を中心として文献的考察を加え記載した.

文 献

1) 清水信之: 小児会陰部に発生せる脂肪腫の1例.

日外会誌 56: 1119, 1955

- 2) 佐藤和宏, 星 宣次, 光川史郎: 男子会陰部脂肪腫の1例. 日泌尿会誌 70: 965, 1979
- 3) 深水秀一, 松本吉郎, 井上邦雄, ほか: 会陰部に生じた有茎性脂肪腫の1例. 日形会誌 2: 103, 1982
- 4) 前原郁夫, 千葉 裕, 佐藤和宏, ほか: 副陰囊を伴った会陰部脂肪腫の2例. 日泌尿会誌 74: 1285, 1983
- 5) 松井孝之, 谷風三郎: 会陰部脂肪腫をともなった副陰囊の1例. 日泌尿会誌 76: 1271, 1985
- 6) 松井孝之, 藤末 洋, 辻本幸夫, ほか: 副陰囊の1例. 日泌尿会誌 78: 1672, 1987
- 7) 野口正典, 松岡 啓, 野田進士, ほか: 会陰部副陰囊の1例. 日泌尿会誌 75: 1154-1160, 1984
- 8) 永野俊介, 高羽 津, 生駒文彦: 会陰部副陰囊の1例. 泌尿紀要 17: 766-768, 1971

(Received on May 30, 1990)

(Accepted on July 20, 1990)